君、爆弾は好きかね？

イシグロ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

梟雄

義理１

ダイナミック自殺

性体位の著者

バンビーちゃんに転生してしまい、ゾンビＥＮＤ待った無し。彼女はゾンビＥＮＤを回避すべく、ある武将を参考に立ち回ることにした。

バンビーちゃんをダンジョーにしてみた短編です。

中身がうっすい内容です。

目次

君、爆弾は好きかね？ ―― 1
君、お茶会はすきかね？ ―― 4
君、悩んでいるね？ ―― 7
君、子育て大変だね ―― 10
君、国籍はどこかね？ ―― 12
君、準備を整えようじゃないか ―― 14
君、ラストダンスといこう。 ―― 17
エピローグ ―― 19
おまけ ―― 23

君、爆弾は好きかね？

誰かになった。
いや、何言ってるんだコイツ。そう思わない方が難しいだろう、けど誰かに成っていた事実は変わらなかった。
ただ、その誰かが解らず数十年が経ってようやく思い出した。あのオサレで有名なＢｌｅａｃｈの敵で、終盤以降に登場する女性…バンビエッタ・バスターバイン。高飛車でプライドが高く、隠れナイスバディそして…ビッチの彼女。何で彼女なのか、小一時間問いたい…それより、この子めちゃくちゃデカいな。あと、可愛すぎるぞ自分で自分を誉めつかわす。
そんな彼女になったらしいが、もはや思い出すのが遅い…そんな事を嘆いても仕方ない、思い出せなかった自分が悪い。
だが、…よりにもよって最強キャラユーバッハに楯突いた自分を殴ってやりたい。とは言え、今更キャラを変えるもの面倒だと思ったのでこのまま突っ切って死のう。どうせ、狛村隊長と相打ちになる運命だ。
…あれ、そう言えばバンビエッタは再登場した…ゾンビとして。
……ヤダー！ゾンビヤダー!!死ねるなら、潔く死にたいからゾンビヤダー！
今後、及び最終目標。
ゾンビは嫌なので爆死しよう。なに、戦国武将も爆死は十八番のようなモノだってどっかの人が言っていた。

「ほう、卿が…よろしく頼むよ」
見た目に反し、恐ろしい女だと思った。目の奥はギラギラとした炎を宿し、こちらの不穏を仰ぐような不敵な笑みを向ける。
どうせお飾りの称号だろうと思い見ていたが、…こいつはヤバい。
あのユーバッハ様が警戒するほど、…他の奴らもそうだ。こいつの名前、顔を目にした瞬間…顔を引きつらせていた。
誰かが言っていた、妖艶な美貌に対して全くの反対。狡猾で残忍た

だし…理に適い効率的な作戦を重視し、敵味方関係なく奈落へと引きずり込む蛇のような女。こいつの前では、虚や死神、果ては同胞までもが餌食になる。
決して義理で動くことはない。
裏切りは当たり前、そう噂される事もある。
コイツは、敵はおろか味方さえ敵であると言う絶対的な認識を持っていた。そんな女の元に付けと言うのか…明日を拝めるだろうか。
「あんたは、俺をどう扱うんだ」
「……簡単には死なせない。それだけは約束しようじゃないか」
そう口にし、微笑を浮かべた。
だが、俺にとってその微笑は奇相に等しいものだった。他の奴らと比べ、まったく感情が籠っておらず、喜びも無く哀しみも無い、まるでプリントされたものをそのまま貼り付けたような微笑。
それでも、俺はどうしても…コイツが嘘を吐いているとは思えなかった。
しばらくこいつと行動していく内に、ソイツの周りは同じ女性だけが集まっていった。男はいない、女性だけ…そう言った趣味かと問えば。
例外はいるが、どうでも良い。
「皆、強かで賢いじゃないか。けれど、私は卿が気に入っているよ」
コイツに気に入られる自分が逆に怖い。
だが、コイツに気に入られればそう易々と死なないだろう。精々、俺もお前を利用するとしよう…子は親に似ると言うが、コイツと一緒につるみ過ぎてこのザマか。
嗤える話だな、バンビーよぉ。

リルトットちゃんの能力ヤバすぎんご。
なんだ、あの暴食。もう、彼女が一人でやればいいんじゃないかな…私、ちょっとそこらでサボって良い？駄目ですか、そうですか。
しかも、何かめっちゃ顔が怖いんですけど。こっちが話しかけるたび、殺気を隠そうともせず淡々と聞いては答える始末。こわ、滅法

師ってこういった人達しか居ないの？あのユーバッハなんちゃらさんだって、殺気籠りっぱなし。
みんな修羅の国育ちなの？
殺気出して、引っ込めた方が負けなの？何処の野生動物だよ。
こわ、もう転職したい。
私、こんなブラックやだ～。もっとホワイトな所がいいぞ。
転職を希望したい、切に思いながら、私の特技をかんがえる。私の特技は爆弾……後は、爆弾。でも、笑顔は人一倍自信があります！（ただし、一般的な笑顔ではない）
あれ、これ駄目じゃん（死んだ目）

君、お茶会はすきかね？

「バンビーくん。君、争いは好きかい？」
「…私は好まないよ。茶会を施していた方が気楽だからね」
「ミーも、争いは嫌いダヨ」
艶やかな黒髪、星十字騎士団に似つかわしくない漆黒の軍服を着た女性が正座をしながら、茶を点てている。手慣れた手つきで湯を注ぎ、彼女より一回り大きな湯呑を数回回し、こちらへと置く。
ほんのり、抹茶の香りがした。
かねてより、ミーはこの女性と長らく交流を持っている。〝E〟の聖文字を持つバンビエッタ・バスターバイン。あのユーハバッハ様の思想をものの見事に完全否定し、あと一歩まで追い詰めた反逆者。だが、その反逆者であるバンビーくんに、ミーは惹かれている。
彼女は、ミーと同じだと思っているヨ。
ミーは愛が全てを救うに対し、彼女は愛を否定もしなければ肯定もしない、いわば傍観者であり観察者。一見違いはあるけど、ミーの本質は彼女と似通っていると思う。
ミーとしては、ミーの被害が減る作戦が良い。ミーの能力、Ｔｈｅ Ｌｏｖｅ（愛）は全ての生物を意のままに操りミーから言わしても面倒なものダヨ。そんなバンビーくん、ミーの能力を悪びれもせずに、直ぐ借りパクするんだから困っちゃうものヨネ！
その度に、良いように使われて悔しいヨ。
被害が多いのは、味方だから周りは愛（ラブ）を切らしてピリピリ。皆、もっと愛を持とう…けど、彼女が彼女だから微粒子レベル以下。
まぁ、おかげでミーも被害は減って良いけどネェ…。バンビーちゃんはミーと同様、自分の手を動かすのが好きじゃないみたいだから。
…あ、お茶会は別だけどネ！
「結構なお点前ネ」
「それはなにより」
うっすらと口元を上げ、微笑む彼女。

かねてよりその生まれ持った容姿のおかげで、可憐さはあるけど…ミーとしては、恐ろしいに尽きるネ。
なんせ、まったくもって感情が籠って無いのだから！
もうちょっと、愛（ラブ）を込めてもいいんだけどネェ…。彼女にこんな事を言っても、改める事はないだろうネ…。
「リル、たまには一服嗜んではどうかね？」
「薄めても苦いっての」
相変わらず、リルトット君はお茶より団子と言った所だヨ。彼女もなんだかんだ言って、お子ちゃまなリルトット君には甘々だからネ。
「わがままだネェ。ミーのも要るかい」
「ん！」
さっき差し出したのに、もう無くなっているし…。
ダイ●ンもビックリの吸引力だヨ。

はぁー。サボり最高でヤンす。
ぺぺさんとの茶会最高。ずっとお茶会開いていたい、死神やら虚相手にしたくないよ。
それと、リルさんや…お茶菓子喰いすぎィ！もう、こっちの手持ちゼロなんですけど…残りは駄菓子だよ、駄菓子。私としては、君の胃袋どうなっているのか知りたいんですけど…ぺぺさん、君の暴食っぷりに呆れて、自分の分まで差し出す始末よ？
その辺、どうなの。恥ずかしくないの？
リルさんの暴食っぷりはいつもだから仕方ない…仕方なくないけど。それにしてもぺぺさんの能力滅茶苦茶便利だわ。
なに、あの完全催眠。多少の誤差はしょうがないけど、ついつい借りパ…借りてしまうのは申し訳なく思っている、死んだら返すよ。もっとも、その対象が死んでしまった場合は本当に申し訳ないけどね。
相変わらず、騎士団の評価は急降下中。
まぁ、敵味方問わず泥仕合させているんだからそう言った評価も受ける。見方も味方で何時、寝首をかくかもしれない存在に対しホイホ

イ野放しにしたくない。
こういうのは、有効的に活用して排除した方が良い。滅法師自体、数は少ないけれど野心家過ぎるのも考え物。ユーハバッハもかつては英雄でも、今ではただのやっかみをまき散らす存在。
ただ、給料分は働くよ。給料分は、ね。
…なんか、リルさんとぺぺさんがジト目でこっちを見た気がする…気のせいかな。

君、悩んでいるね？

その女は酷く冷酷な存在だった。
しかし、それでいて妖艶な美貌を放つ美しい人だ。
あのユーハバッハ様さえ、所詮は手駒に過ぎないのだろう。使えるものは何でも使う、たとえ陛下であっても。ペペの評価ではあるが、私自身もそう言った評価を彼女に持っている。
彼女の爆弾は厄介だ、何せ視えない様にしている。
爆弾、地雷は彼女の意図でどこかしこも仕掛けられ、挙句の果てには味方でさえ仕込む残酷さ。見えないその脅威は、蜘蛛の巣を張るがごとく何処にでもあり、見えないのだから恐ろしい…ペペの能力も相まってその威力、脅威は騎士団全員が神経を尖らせるほど…いつ爆発するかわからない、陛下の粛清も視野に入れなければならない中で、これは…酷いものだった。
正義感のあるバズはやはり彼女を毛嫌いしている。
ただ、…私は彼女をそこまで嫌う事は出来なかった。確かに、彼女にやり方や思考に不満はあるだろう。
…しかし、それは些細な問題だと思ってしまう。
「卿は何を望む？」
彼女は私に対し、こう投げかけた事がある。
望むこと…私はユーハバッハ様に忠誠を誓う。バズビーが行おうとしている事を、私は止めようとは思わない。私自身も、あのお方に唯一だった叔父を殺されている。
だが、叔父との思い出は、良いものはない。
…それでも唯一の肉親であった。
「では、量れるかね。天秤に乗せるモノを、見極めたうえで」
「…何を言わせる気だ？告発への誘導か」
「興味さ。卿は他の者とは違って、なかなか興味深い…それだけだよ」
彼女はそう感情の籠っていない微笑を浮かべた。口元を笑わせているだけで、目は心から嗤っていない。

彼女…バンビエッタは人間、個人の本質に興味がある節を持っている。
その言葉に、私は今どういった顔をしているだろうか。ユーハバッハ様より力を認められ、〝B〟としての力を与えられた恩、唯一の肉親を手にかけられ煮え滾る復讐心…これを乗せて、果たして釣り合うのか。
未だ、その答えが見つからず…あの日が来ようとしていた。
きっと、その日を迎えても…私は彼女の問いに答える事は出来ない。私も、彼女…バンビエッタのように正直者であったのならこう悩む事はないのだろうな。

イケメンくそ眩しいんですけど。
いや、私の方が断然セクシーだ。このプロポーションを自慢せずにはいられない、日々のスキンケアを大切に、日ごろから筋トレをしている私に、死角はない。
ただし中身はクソであるけど。
ユーハバッハ様の個人召集をガン無視してブラブラとで歩いていたら、何とも儚げな金髪イケメンと出会ったので、話しかけてみたら№2のユーグラム・ハッシュバルトさんでした。あの因果逆転の能力を持ち、作中屈指の強キャラでもうこの人だけで良いんじゃないかと言うぐらいのチートさん。
親友のバズビー君がかませに成ったのは、この人のせいじゃなくてバズビー君本人だと思うんだけど。
バズビーファン、ごめんね。
まぁ、それは別にどうでも良いです。
興味ないです、お茶会が何より大事です。襲撃なんてどうでも良いんで、適当に茶器めぐりしたいんですけど。
あと、駄菓子屋で大人買いしなくちゃいけないんで（使命感）。
そうは問屋がおろさずリルトットちゃんに急かされ渋々と参加することになったよ。ぺぺさんも、あんまり気のりはしないみたいだったけど、命令だからという真面目な回答を貰った。

こんなブラック企業並みの組織、辞めたいんですけど。
一応、私これでも生身の人間ですよ。霊圧があるだけで、マジで生身の人間よ。そんな１０００年と言う生きた化石じゃないんですよ、奥さん。
あー、ユーハバッハ死なねーかなー。後ろからバサーっと斬られないかなー。そうすれば、私転職できるんですけど。しかし、就職先が未だに見つからないので結構焦っています。

君、子育て大変だね

はぁーい、どうもどうもバンビちゃんですよ。

今日はちょっとお出かけしているんですよ。場所はなんと、瀞霊廷（せいれいてい）って場所なんですよ。なんか漢字一発変換できるみたいなうんちくと、死神がいっぱい居る所で有名な瀞霊廷。その瀞霊廷を襲撃しているんだ、今。

うん、今。

周りが滅茶苦茶ドンパチしているんだよ、すごく煩いくらいに。実際、耳塞いでも煩いんだわ。

……で、お前何しているかって？サボっているに決まっているじゃないか、何で個人的に恨みも無い瀞霊廷を襲撃せなあかんのか。とはいえ、何もしないでいるのもアレ何で適当にユーハバッハ様のケツに爆竹入れるような悪戯、拷問の準備をしようと思います。

ブラックな社長が居るから、ブラックになるんだ。

でも、今日はロバートさんが居るしそれに免じて爆竹だけで許すよ。

…私さ、梨が好きなんだよ。日本の梨が一番好きかな、西洋の梨も好きだけど…あの甘さが癖になるんだよね。美味しいよね、梨…。

さてっと、手始めに何処をブラつこうか。

医療現場、科学研究所…どっち行っても、蛇と鬼が同時に出るんだよなぁ。

また、あの娘が何処かで悪戯しているな。

あの娘、バンビーはいつもそうだった。あの子の教育係としてのあの日々が、一番充実していた。

昔から計算高く、野心家でユーハバッハ様を蹴落とさんとする姿勢は変わらず、それが日々高くなっている。私は、それを間近で見続けた。最初は恐怖と焦燥感に駆られていたが、今となってはあの子に期待を寄せてしまった。

星十字騎士団、その中に潜むロンリーウルフ。

群れを成さず、群れる事が出来ず、群れに馴染めない哀れな娘だった。だが、あのバンビエッタはそれを物ともせず気高く強かに育った。
野心を募らせ、いつの日かユーハバッハ様を止める、いや…その息の根を止める日も、近いかもしれない。閣下の部下とは言え、これでも純潔の滅法師の末裔である私は、この現状をどうにかしたかった。
死神といがみ合わず、ただビジネスとして割り切ってしまえばいい。
過去に縋っては、低迷する。何れ、私たちの存在意義を失う。
…それでも許されない、それでは過去の礎となった人々に申し訳ない。それが今やここまで先のばされてしまった。
「気に入らない」
「…何が、かね？」
「この行動は…実に、気に入らない。瀞霊廷を襲撃？アホの極み、死神が無くなれば破滅への一歩、死者の魂は救えん。霊王なくして、世界は安寧を続けられない…あの男が、霊王になる資格はない」
いつになく、恐ろしい形相だ。
普段から感情の無い笑みを見せているが、今の顔は…憤怒。
「言葉を慎みなさい、バンビエッタ」
「ハ、ハハハ。コレは愚痴ですよ、師…。ですが、あなたもそう思いでしょう？
アレは霊王には成れない、成ってはならない。あの異常者に…この世を崩させるわけにはいかない。まだ、あのアイゼンとかいう死神がマシですよ。
死が無き世界は、所詮画面の世界だけ。
生と死、忌反し合うからこそ、美しい…！」
単純で、恐ろしい彼女に私は、期待をしてしまうだろう…あの方が崩れ落ちるまでずっと。
まだ、嫁入り前の娘に…何と言う過度な期待をするのか。
そう、自分を攻め続ける…。

君、国籍はどこかね？

注意：リジェさん口悪いです。

「ほう、狙撃兵か…。狙撃は良いものだよ、被害を最小限に抑えられる」

「…プータ、何のようだ」

「その目、良いじゃないか。実に、惜しい男だ」

何時になく、彼女は不敵な笑みをこちらに向け嬉々としている。

こちらの侮辱を物ともせず、ただこちらをしっかりとみて笑みを向ける。しかし、彼女はこのプータ、売春婦呼びは些か、申し訳ないと思ってしまう自分がいる。分かっている、彼女は女性だ…どんな性格であれ、こちらが羨むほど女傑だった。

ユーハバッハ様はこの女を毛嫌いしている、他の隊員たちも同様だ…だが、例外は少なからずいる。

彼女の本質を知り、その言動は些細な事であると知って。

「君のその銃は、どこまで届くかね？」

「…何処までも、だ」

「……惜しい、実に惜しい…あの王の物であることが腹立たしいくらいに」

そう言い残し、彼女は踵を返す。

姿が見えなくなるまで、私は彼女を見送る。彼女の言っていた言葉、何処まで届くか…あの時は、距離の事を言っているのかと思った…が。

「顔つきが変わったねぇ」

「…そうか」

あの女がこちらに問いかけた言葉、この銃は何処までも届くだろう。

自身の能力、ジ・イクサシスは万物を等しく貫通させることが出来る、この能力は凶悪だ。射線上であるならば、どんなものでも貫き通せる…如何なるものも、いかなる存在さえも。

この力はまさに神の力である。
だが、目の前にはその神の特攻が待ち受けている。
こちらが不利だろうだが…不覚にもコレを愉しんでいる自分が居た。あの女の言葉に踊らされる、癪な話だがコレをもって証明しよう。
「バラ　ディオスであるジ・イクサシスはどんな物も貫く、王であれ同じ神であれ…どんな物も!!」
銃口をあの男と女へと向け、照準を整え引き金に指を掛けた。
セーフティはとっくに外れている、後は引き金を引くだけだ。…心臓の音がうるさい、こんなにまで追い詰められるのは初めてだ。
これで良い、これで良いんだ…。私は初めて満足している…同等の力を前に、満足していた。

狙撃兵っていいよね、シモ・ヘイヘやソ連の死の女パブリチェンコも凄腕。
あのリジェ・バロさんの能力、使わなきゃ勿体なさすぎるでしょ。あーあ、あのユーハバッハの親衛隊じゃなきゃよかったのに、凄い勿体ないわー。
それはともかく、あの人ってラテン系の黒人…生まれはやっぱりスペインとかだったりするのかしらん。
名言、迷言…？チョコラテ・イングレスはスペインの遊びの一つらしいし。
意外とこの星十字騎士団、多国籍な職場である。中国人と思わしき蒼都（ツァン　トゥ）やペルニダみたいに、霊王の左腕とか…。
いや、後者は国籍云々じゃないわ…人体だわ。
何かそこらへん気にしないで色々と喋っていたけど…公用語って英語みたいです。
それにしても、高校生なのにペラペラな石田くん、頭いいね羨ましいね。原作ではバンビちゃん毛嫌いしていたけど、私はとってもウェルカム。ブラックでなければだれでも良いよ、ユーハバッハと同じ毛色だったら即、辞めるけどね！

君、準備を整えようじゃないか

「ヤレヤレ、冷やかしは御免だヨ」
「卿が、噂の…。なかなかハイセンスな人だ…本題と行こうか」
「ネム、追い出」
「不老不死を殺してみたことはあるかね？」
うっすらと不気味な笑みを浮かべる小娘の姿は、まるで蛇そのものだった。
十一番隊隊長とは全く別の意味で恐ろしい狂犬だネ、この子娘。
それと、子供がその本質を忘れずに大人になったかのようだ。
「不老不死、ネェ…。試したことはないヨ」
「まぁ、言い当てだが…似たようなモノだ。卿の知恵を貸してもらいたい」
よくもまぁ、いけしゃあしゃあと…。お前は単にあの男を殺す為なら、このワタシすら何事もなく使い潰す、そう腹の中で嗤(わら)っているのだろうネ。以前、滅法師を解剖したことはあるが、…この子娘はソレを知ってもなお、交渉するだろうネ。ワタシも仲間意識は微塵もないが…子娘の周りには、同情をしてあげるヨ。
「具体的に、何が不老不死なのかネ」
「自らの因果を操作する、未来予知と現実改変…さ」
「馬鹿じゃないのかネ。理に反しているヨ」
「本当に、能力だけは一級品だ」
呆れたような溜息を吐く子娘は、じっとこちらを見据えている。まるで、現身を見ているかのようだネ。ギラギラと欲望、野望を抱きこの私に対して、誰に対しても自信ありげな態度を始終行うのは、自分で言うのもあれだが…ワタシも同類だろうヨ。
「それは私の専門外だヨ。他を当たるんだネ」
「では、…サンプリングが在ればよろしいかな？」
「サンプルも何も、オマエは何を…」
なぁに、現物は幾らでも取れる…そう溢しながら小娘は指を鳴らした。

一体何をするかと思えば、ただ…指を鳴らした？ちがう、アレは生半可なものではない…自身の信号が鳴り響く。
小娘が行った事は、そういう事なのだろう。
サンプルを取りに行ける、取れる…と言うことは、それが行える状態だと言う事だった。
「少々、時間を貰えるかね。少しばかり…遠くにあるようだ」
「オマエ…一体、何者だネ」
「バンビエッタ・バスターバイン…聖文字〝E〟を持つモノさ」

うわ、サイコパスやん。
初登場の時のインパクトさながら、登場するたびにデザインがコロコロ変わるキャラ、早々いないんだけど。
というか、ＢＬＥＡＣＨのキャラってハイセンスが一周まわって奇抜に成っているキャラ居るよね。
さて…あのブラック上司どうせ、総隊長とかち合っているんだろうな。
そう思いながら現場へと急行する、急いで向かっているなか道中、星十字騎士団同士でもめ事が起こっていた。この場に来て、もめ事を起こすとか…まったく規律を見直した方が良いんじゃないだろうか。
え、何？ブーメラン？
いいんだよ、私は爆死する予定なんだから。必要な準備だよ、準備。
「…やはり、貴様か」
おっと、早速怒りが天元突破でムカチャッカファイアーインフェルノなユーハバッハ様とかち合わせた。先ほど指パッチンで爆発させた片腕は、根元からゴッソリ無くなった痕が残っている。もっとも、吹き飛んだ腕の原型は少し残っていただけで、後は木端微塵で肉塊と化していた。
早速サンプル回収っと。
悪びれも無く肉塊をピンセットでつまみ、採取しながらユーハバッハ様の顔色を覗く。
「顔色が優れないようだが、大丈夫かね？」

「…フ、フハハハハ……随分だな、バンビエッタ」
「すまないね、先ほど戦闘で誤爆してしまったようだ。なにせ、数は多いからね」
「ふん、扱えぬ数を持つからだ。…それとも、死にたいのかね？」
「…はて、それは卿の方では」
青筋を浮かべ、ギロリと殺気を籠った眼でこちらを見ている。
こわ、まったくブラック上司は直ぐキレやすいから困りもんだよ。たかが腕を吹っ飛ばしたくらいじゃん、粛清よりずっとマシなんだけど。その腕も、持ち前の改変で全快するのだから、一つや二つ、吹き飛んでも支障はないだろう。
「貴様の能力を買って聖文字を与えた…だが、ここまでされるとはな」
「人望が無い、それだけではないかね」
そう返せば何処か、…近くで血管の切れるような音がした。
おそらく、ユーハバッハからだろう。まったく、この人煽り耐性無さすぎじゃないですかね。
しまいには攻撃しだすし、危ないよ当たったら死ぬんですけど。まぁ、私自身おちょくってはいない。ただ、指摘しただけである。
それなのに、これだ。まったく、ブラック社長は嫌だね…本当に。
「やれやれ、卿はまず寛容な心を持ったらどうだろうか。幾分か、慕われやすいだろう…もっとも、マイナスからの回復だがね」
その言葉と共に、ユーハバッハはぶちギレたようだった。

君、ラストダンスといこう。

「神さま気取りとは、ずいぶんと言い切ったものだ。神とは、己の中に宿り心の拠り所と解釈しているが…卿のはこう呼ぶべきではないかね、偽神ヤルダバオートと」

この上司って、何で多方面へ自分から喧嘩を売るのだろうか。

なに、マゾヒストなの？

すんごい迷惑なマゾヒストだな、私としてはもうお近づきになりたくないので早急に転職を希望します。あーあ、私もどっかの隊長格から卍解奪ってカード増やしておけばよかった。

「貴様…なぜ」

「……ふむ、生きているかね？動けるかね、閣下」

「…なめるではない、小娘ごときに心配されるほど落ちてはおらぬ」

流石は総隊長。

あのユーハバッハを負かすほどの実力者、老いてもなお力はさほど衰えていないか。そのすべてを焼き尽くす劫火を解き放ってもらいたいもの。

「老いぼれと共闘するか…バンビエッタ」

「あまり口を開くと…すべて焼かれるぞ」

目の前で起こる戦闘は、目にみはるものであった。

全身黒ずくめの滅法師が一人で、あのユーハバッハと渡り合っている。滅法師が一度指を鳴らせばユーハバッハの片目がはじけ飛ぶ。だが、それでもユーハバッハには厄介な再生能力があるのにも拘らず、連続で片目が爆発し続ける。

膨大な血液が噴き出し、目玉と周囲の肌であったとされる肉片が飛び散る。

その誘爆だろうか、今度は耳の部分まで爆発が起きる。

それは乱反射が如く、身体の全てに渡る部位に誘爆が起きつづけていた。ユーハバッハの全身が、その起爆剤に溢れているかのように。

恐ろしくも、合理的な様。
だが、剣技に至ってはユーハバッハの方が上であった。
滅法師も受け流す事で傷を負う事無く凌いでいる。それでも、実力はユーハバッハの方が勝っていた。
周りはユーハバッハの血液と肉片、剣で出来た傷跡、強大な力を加えたかのようなひび割れも出来ていて、それは戦場。互いは息を切らさず、息遣いがこぼれただ…機を伺っている。
「火とは、畏怖であり栄光であるとされる」
口を開いたのは滅法師だった。
「ふん、世迷言にしてはよく解っているではないか」
「その火は、人々にとって神より奪いし罪であった。そう、人は叛逆を覚えた」
滅法師は軍刀を力強く握りしめる。
刃によって皮膚が切れ、血が滴り落ちる。ぽたり、ぽたりと地面へ滴り落ちていく血は川の流れのようにユーハバッハの血液と交じり合った。
「神は、叛逆の為にある…そうは思わないかね?…閣下、灯を」
この時、今滅法師のやりたい事を知ってしまった。

エピローグ

そういえば、このとき総隊長とかち合ったのってあの双子コピー滅法師どもだっけ。
なら、面倒だな手札見せてしまったし…。
だったらこの時、私はどのユーハバッハを相手しているのかしら。
「……焼身死体を目にするのは、初めてだよ」
うげぇ、臭いし吐きそう……。
トラウマ待ったなしだよ。確認するにも、やだなぁ…さらにＳＡＮチェックが入るんですけど。
「閣下、卍解は戻りましたかな？」
「その閣下と言うのは止めよ」
「はて、それは無理な話だ。私は、卿を知らぬゆえ…」
「…護廷十三隊総隊長、山本元柳斎重國である」
「バンビエッタ・バスターバイン…Ｅの聖文字を持つも」
胸部に熱く激しい痛みが走る。
は、はは…やはり、アレは違うか。
「……よもや、ロイドごと私を殺しきったものは貴様くらいだ」
「光栄だよ、卿は…死に底なったがね……がっ、ぐぅう！」
この野郎、剣の柄まで深く入れやがった。
息が、苦しい…まずい、足が地面についていない…浮かされているのか。
「貴様のお蔭でここまで返り咲くのに、手痛い出費をしたものだ。…あの男、ロバートもよくやった。
だが、能力は返してもらうぞ」
「……ええ、返しましょう。この能力は、私にとっては出来過ぎた…」
…先生も、もう居ないんだっけ。
聖別で、…息が続かない。それに思考もまともに働かなくなってきたな、そういえば…総隊長、まだ、そこに…居るだろうか。
「…山本、殿」

先の爆発で採取したユーハバッハの肉片が入った試験管を視界に見えない山本へ放り投げる。…おそらく受け取ったのだろう、地面に落ちた音がしないのだからそう、思うしかない。
「師＜お父さん＞、この身…あなたと共に過ごせたこと……とても、楽しかった」
このまま、死ぬわけにはいかない。
聖別が起こる瞬間、霊子を流し込み最後っ屁と行きましょうか。私、バンビエッタは長らく舞台に立つ存在ではない、ゾンビになり果てるはずだった。でも、ゾンビだけは嫌で、ここまでやり遂げたのだ…最後は、絶対にゾンビになんてなりたくない。
「死ね、神の叛逆者よ」
頭上から、一筋の光が見える。
あぁ、アレを見た父さんは死んだのか。…きっと、魂までもが消えてしまうだろう…残酷だな、神様って。
私は柄にもなく、祈る様に手を伸ばし添える。

「神よ、我が身を持って鎮魂歌を謳いましょう…」
「滅法師完聖体　神の慈愛＜サマエル＞」

バンビエッタとユーハバッハを囲う様に、周囲に壁を模る光の柱が幾度も上空から突き刺していく。バンビエッタの身体は火花をまき散らし、背中の肉を抉り燃え盛る翼が生えその身体の血肉を炎に焼かれながらユーハバッハごと火を包む。
燃え盛る身体に、二つの光…金色に輝く瞳は曇り陰る事を知らず輝き続ける。
「く、くそ、…バンビエッタァア!!」
「…何を、慌てる。卿はこれ位、直ぐに……ゴブ、ゲフ…甦る、だろう」
「火が、燃える！〝私は、私に…〟ぐ！」
煩いぞ、死ぬならさっさと静かに死んでくれと付け加え足蹴りするバンビエッタ。
ユーハバッハは剣を手放し、炎から逃れようとするが光りの柱がそ

れを遮り、逃す事を許さなかった。僅かに宙に浮いていたバンビエッタは受け身を取れず、地面へと転がされる。
「ユーハ、バッハ…卿は、本当に哀れな児だ」
そう、今にでも消えそうな声を掛け胸部から噴き出る血液を垂れ流し、ユーハバッハへ声を掛ける。
「神は、いかなる万人もすべからく慈悲を与え、なさる…と言う。…サマエルである私は、神の慈悲は、…無いに等しい……。
神の敵対者、サタン……ふ、ふふ。我ながら、馬鹿な事を言うようになった…ガハ」
炎は勢いを増し、壁の中の全てを焼き尽くさんばかりに勢いを増す。
膨れ上がり、昇る黒い硝煙は天を貫く。
その様子を瓦礫の下から覗く一人の小柄な少女が居た。あちこち傷だらけで、埃被った姿で、ただジッと見据えている。
リルトットであった。
「…まるで、竜だな」
そう、零しながらポケットから小さな包みを取り出す。
包みを広げると、中は悲惨なものだった。ボロボロに砕け散った、クッキーらしきもの。リルトットはそれをつまみ一口、ひとくちと口に含んだ。
「…味気、ないな」
そう溢し、再度黒い硝煙を見た。
瞬間、黒い硝煙の後を追うように爆炎の柱が天へと突き刺した。劫火、それは全て残さない火である。

このあとの展開、それはバンビエッタには解らない終演だろう。
この劫火でユーハバッハはまた甦り、霊王を殺し一護たちに挑まれているかもしれない。はたまた、本当にユーハバッハは死んですべて焼かれたかもしれない。
だが、一つだけバンビエッタは遂行したのだ。
彼女がかねてから遂行しようとしていたこと、それは…ゾンビから

逃れる事だ。
　彼女は達成したのだ。経緯は本筋から大きくそれる事になっても、それでも彼女は成し遂げた…拍手を、賛歌を彼女に捧げて欲しい所である。

おまけ

…十年後

「……」

「おねーさんって、どこから来たの？」

「なに、隣町から来たのだよ。知己に会うためにね」

僕とおねーさんが会ったのは、この町の駄菓子屋さんで出会った。お父さんとお母さんは虚が出たとかで、僕を此処に預けて倒しに行った。オロオロするお母さんに、このおねーさんが僕の面倒を見てくれると言ったらしい。

真っ黒で長い髪、黒くて変わった帽子を被った綺麗な女性。

全身厚着で手袋をつけ、完全防備？と言ったモノ。

まだ、夏は始まったばかりだけど…何か、ワケありなのかな？

「卿は、今は楽しいかい？」

「え…うん！楽しいよ、苺花＜いちか＞ちゃんと遊んだり友達をサッカーしたり、お父さんとお母さんが笑ってる毎日が楽しいよ」

「そうか…それはとても楽しそうだ」

不思議な言葉遣いをするおねーさん。

でも、不思議と温かい感じがする。まるで、…お母さんみたいな人だ。

「おい、こんな所に居やがったのか。バンビ」

「すまないね。…しばらくは此処で待つつもりだ」

「あ？…っち、お守りとはな。お前らしくもないが、…まぁいいや俺もサボるつもりだし」

金髪のおねーさんがやって来たと思ったら、おねーさんの足に持たれながらヤンキーみたいな座り方でお菓子を食べ始めた。

マイペースな人だなぁ。

「がきんちょ、やる」

「がきんちょじゃないよ、僕は一勇＜かずい＞って言うもん」

「そんなん知ってるぜ」

…なんだろ、変な人。
おねーさんの友達？って人から、お菓子を食べながらお父さんたちの帰りを待つ。その時、ビリビリと身体が震える感じがした。
目の前の景色がグニャリグニャリと歪んで、何か大きなモノが来た。真ん中に穴が開いた嫌なモノが、こちらを見ている…そして口を開いている。
涙が溢れる、怖い…怖いよ。お父さん、おかあさん早く帰ってきて…僕、怖いよ。と、そう言ってしまった。
「大丈夫だ」
おねーさんはそう言いながらいつの間にか手にした弓矢を構える。
「…外すんじゃねーぞ」
おねーさんの友達はそう言いながら、僕の頭をガシガシと乱暴に撫でた。痛いけど、少し落ち着く。
おねーさんはキラキラと輝く金色の目を細め、矢を放った。あ、石田おじちゃんと同じだ…この感じ。
その後直ぐにあのグニャグニャや大きなモノは消えちゃった。
すると、駄菓子屋さんが店の中から出てきて驚いた様子でおねーさんを見ていた。目を細めながら、お礼を言っている。しばらくしてから、お父さんとお母さんがやってきて僕を抱きしめた…良かった。
おねーさんにお礼を言おうとしたら、何処にも居なかった。
駄菓子屋さん、浦原さんも何処へ行ったか分からないらしい。…おねーさん、石田おじちゃんと同じ人、なのかな？